



俳句ゆめクラブ会報

2021年9月28日

第 136 号

台風一過なんとも又暑い日になった、この秋は寒暖の差が目まぐるしい、我が世代の人生の秋もこれ程ではないが思わぬ起伏があり穏やかとは言えない。今回も通信句会、兼題は「曼珠沙華」であった。

梅田先生の句

曼珠沙華はがねのごとく張りし蕊
柳散るベンチにひとり書を開く
あれほどの秋蟬の声もうあらず

梅田先生選

《特選》

老いてなほふるさと恋し秋彼岸

浅見法子

(年をとっても故郷は恋しいものです)

サファイアのやうな輝き秋の海

小林健一郎

(サファイアのやうな海が新鮮でした)

一斉に田からたばしる稲すずめ

吉澤愛子

(稲雀の様子がよく描写されています)

月草の花の青さは空の色

岩松忠子

(月草は露草のこと、よくできた句です)

野の花の囲む石仏里の秋

大井昭子

(野の花に囲まれた石仏、幸せそうです)

鮮やかに千の直立曼殊沙華

瀬戸川公子

(千の直立がとてもよかったです)

病みし友この名月をどこで見ん

宮島昭夫

(病友を気遣う気持ち伝わってきます)

畦道や飛び火のごとく曼殊沙華

岡田時雄

(飛び火のごとくと言ったところが良いですね)

青空に映える棚田の曼殊沙華

長澤輝子

(棚田の曼殊沙華が見えるようです)

雲切れて星も寄り添ふ良夜かな

八千代幸男

(今年の十五夜は最高でした)

《入選》

日本中人家を流す秋出水

鈴木幸恵

公園にテントの花や秋日和

長澤輝子

曼珠沙華閻魔王のかざしとも

岩松忠子

藁塚や縄文時代思いけり

岡田時雄

曼珠沙華白花一つ二つと混じり

大井昭子

秋寒し愚行蛮行世に絶えず

小林健一郎

金木犀鼻孔くすぐるほど香り

瀬戸川公子

今年また生垣沿ひに曼殊沙華

有村弘

街路樹に沿ひ彩りし曼殊沙華

宮島昭夫

寡黙さを増して来たりし吾亦紅

八千代幸男

老い二人見上げてをりし良夜かな

有村弘

山上のいま孵化したる群れ蜻蛉

鈴木幸恵

曼珠沙華これ見よがしの高麗の郷

浅見法子

赤とんぼいつも目線の上を飛び

岡田時雄

其処此処で深夜に声や月今宵

宮島昭夫

曼珠沙華突然月日知らせをり

八千代幸男

仰ぎ見る雲の形も秋となり

長澤輝子

帯のごと土手の斜面の曼殊沙華

吉澤愛子

雲流れ行けども行けども芒原

瀬戸川公子

思ひ出を運びてきたる金木犀

岩松忠子

天心に煌々と照る望の月

吉澤愛子

ありつたけの声絞りだし法師蟬

浅見法子

艶やかといへど儂き曼殊沙華

小林健一郎

眩しさに眼の暗むほど秋日差し

有村弘

枝先の空欄まんと大銀杏

大井昭子

罪なりや刈り払はれし彼岸花

鈴木幸恵

互選

一斉に田から田ばしる稲すずめ (4票)

吉澤愛子

寡黙さを増したる雨の吾亦紅 (5票)

八千代幸男

赤とんぼいつも目線の上を飛び (3票)

岡田時雄

野の花の囲む石仏里の秋 (4票)

大井昭子

鮮やかに千の直立曼殊沙華 (4票)

瀬戸川公子

天心に月煌々と輝けり (6票)

吉澤愛子

青空に映へる棚田の曼殊沙華 (3票)

長澤輝子

雲切れて星も寄り添ふ良夜かな (5票)

八千代幸男

「決定事項・連絡事項」

・次回句会 10月26日(火) 13時より

県活205号セミナー室

兼題「秋うらら」

他に自由題で二句、合計三句提出のこと。

(小林健一郎記)

(了)